文化と芸術
文化・芸術研究センター
ニュースレター
Vol.6
September 2007

CONTENTS

巻頭寄稿 1
研究活動の紹介 2~5
文化芸術セミナー 6
ギャラリー・ホール 6
静岡国際オペラコンクール 7
本学の国際学術交流 7
本学開催 学会報告 8
インフォメーション 8

静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター
静岡県浜松市中区中央2丁目1-1　〒430-8533
●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

Art & Culture

新たなインキュベーターをめざして
―文化・芸術研究センターのこれから―

副学長
文化・芸術研究センター長
上野征洋
Yukihiro Ueno

この4月より、文化・芸術研究センター長の職責を担うことになりました。前学長、故木村尚三郎先生の構想から発足したセンターは、これまでの7年間、「公開講座」や「文化芸術セミナー」の開催、受託研究、共同研究の場としての機能を果たしてきました。しかしながら、開設当初に検討されたセンターの役割や木村先生の「想い」を改めて検証してみると、さらなる使命の構築と活動基盤の強化が必要であり、気を引き締めて取り組んでゆきたいと思います。

センターには2つの大きな方針があります。ひとつは「研究拠点の形成をめざした研究活動と情報発信」で、もうひとつは「開かれた大学を実践する地域との交流」です。前者においては、「研究プロジェクト」「ニュースレターの発行」「研究活動の支援」などの活動を実施、後者においては、「公開講座・文化芸術セミナーの実施」「産学官連携の推進」「地域文化事業の実施、協力」「ホール、ギャラリーの活用促進」などがその内容です。

このような活動を通じて、学内においては「両学部の連携・研究成果の共有」をめざし、対外的には「開かれた大学としての交流拠点」としての役割を果たすことがその使命です。その具体的な活動内容に関しては、従前より専門部会の教職員による検討をお願いし、それをふまえて、「文化・芸術研究センター運営委員会」によって決定する方式をとってきました。

これまでの諸活動を振り返ってみると、「研究プロジェクト」や「公開講座」においては、いずれも先端的かつ学際的な取り組みが行なわれ、その成果の情報発信や集大成として、セミナーや展示イベントなどが実施されてきました。

これらの活動は、開学後日が浅く、知名度も十分でない時期においては、本学の名称と役割を地域社会に周知し、より多くの受験生や企業社会の耳目を引く効果がありました。

しかし近年、本学教員の研究活動や公開講座、新能のように学生も参加するプロジェクトが広く認知されるに従って、外部からの受託研究や共同事業などの打診も増え、体制の再構築も考えなければならない状況に至っております。加えて、本年より「国際オペラコンクール」の事務局が本学内に置かれ、近い将来には文化・芸術研究センターの所管事業として運営に携わる可能性も大きくなってきました。

このように受託研究の増加、新たな事業の運営、地域交流の拡大、とセンターをとりまく環境は一段の飛躍を促すよう変化してきました。すなわち、より広い間口と奥行きをもつセンターとしての役割が求められつつある、という認識です。

また、来年3月には開学8年を経て、完成年度からの第2ラウンドが終了し、本学はいよいよ真価が問われる3周目の4年間に入ります。このような大学ならびにセンターの環境変化に対応してゆくためには、いま一度、これまでの活動内容を点検し、さらなる展望を明確にする必要があります。この機会に地域社会からの要請に応え、かつ本学の教育・研究活動の成果を社会化するについて、改めて自らを問う好機ではないかと考えます。

すでに5月には、専門部会メンバーと意見交換をし、今後のセンターのあり方に向けて提言をお願いしております。意見交換の場ではセンターの役割としては「SUACのブランドづくり」、活動基盤の強化では「研究所としての機能と人材を備えるべし」などの提案も出されております。

こうした提案を傾聴しながら、中長期的な到達目標や活動プログラムの構築をめざすことを本年度の主要な活動として加えたいと考えています。もちろん、これまでの研究プロジェクトや公開講座は継続しつつ、その先の展開はどうあるべきか、社会的要請や研究活動というニーズとシーズの均衡はどうか、インキュベーターとしてどのような機能が必要か、そのような検証への取り組み、そして役割の高度化をめざそうとするものです。

地域社会における本学の役割も少しずつ変化し、「よりよい教育」に加えて「魅力ある研究」、そして「地域への還元」へという好循環を創出してゆくことが求められているようです。それに応えられる知的交流あるいはクロスオーバーの拠点として何が必要なのか、あるいは連携のメディアとしてどんな可能性を視野に入れるべきか、などを検討してゆきたいと考えています。今後、文化・芸術研究センターの専門部会や運営委員会で議論を交わし、機会をみてその結果を再びお知らせしたいと考えています。文化・芸術研究センターの機能と役割を高め、さらなる進展に向けて、皆さまの提言、提案をいただければ幸いです。

特別研究紹介 1

（平成18年度 学長特別研究）

風土性とデザイン

河原林桂一郎（デザイン学部長）

平成18年度の学長重点テーマ「地域の文化力を高める」の研究の一環として、モノづくりの街、浜松における文化のあり方としてのデザインの考察を推進している。具体的には、浜松の地域性や風土性の特徴を生かした文化の発信として、既に定着している音楽に加えて、デザインを対象にすることを目指した研究活動である。

第1段階として、スイスのプロ・ヘルヴェティア財団が日本で巡回展示した「スモール&ビューティフル:スイス・デザインの現在展」（スイスデザイン展）を浜松で開催した。同展の浜松展実行委員会の主要メンバーとして展示会開催の企画・運営を行なうと同時に浜松地区のデザイン関係者によるネットワークづくりを目指した。スイスデザイン展は、2006年5月19日から6月18日まで浜松市の旧浜松銀行協会（浜松市中区栄町3-1）にて開催され、約1,500人の来場者があり、成功裏に終了した。

本学が主催して関連シンポジウム「人を豊かにするデザインの力:スイスから学ぶこと」を2006年5月28日に開催した。スイス・デザイン誌エディターのメレット・エルンスト氏による基調講演「スイスの地域とデザイン:コミュニティーとクラフトマンシップ」の後、慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科の三宅理一教授をゲストに浜松のデザイン関係者（吉良康宏氏、長谷守保氏、土屋和男氏、河原林）によるパネルディスカッションを実施し、政令都市を迎える浜松からの「デザインによる文化の発信」について意見交換を行なった。参加者（浜松地域デザイン関係者127名）には、企業関係者も多く、当日のアンケートでは、この地域のデザイン関係者のネットワークを期待する声が多かった。

第2段階では、地勢や風土を背景として現在も地域に根付いているスイス・デザインに学ぶことで、遠江の風土に根ざした「浜松デザイン」の発信を目指している。浜松の風土性とデザインの果たす役割についての考察を行い、地域のデザインコミュニティのネットワークづくりを更に推進中である。モノづくりの街である浜松が、地方都市でありながら世界レベルの技術を集積し、その技術をかたちにする高いデザイン力を備えている点に注目し、この地域でデザインについて考えることは、文化のあり方を考えることであるとの認識を共有している。

スイスでは、美しい風土を背景に生み出された洗練されたデザインが、人々の日常生活に深く関わっている。多民族・多言語で多くの文化が混交したスイスで生み出された高質なデザインは、小さくても美しく豊かな生活を実現しており、浜松との共通点も多く感じられる。卓越したスイスのものづくりが、強い競争力を世界で得ていることは、浜松にとっても大変興味が深く、学ぶところも多い。

シンポジウムの基調講演で発表されたように、マックス・ビルがイニシアティブをとったいわゆるスイスデザインの"GOOD FORM"は、良質で美しい形・機能を有している。そのルーツは1930年代に遡り、規格化された製品のデザイン品質の高さには定評がある。スイス国鉄の時計やヘルベチカというタイポグラフィーを生んだ土壌は、クラフトマンシップに支えられ、丹精で精緻に作りこまれたスイス製品の背景となっている。こうしたデザインに反対した立場の優雅で詩的な形態のデザインの"Lamp Cloud"（スージー・ウェーリー・ベルガン）は、機能主義や合理主義的なものの考え方に対する疑問を呈するものであった。70年代以降は、ポップカルチャーやエコロジーという自由な生活からの発想で、"Swatch"の時計や"Freitag"のバッグのようにスイスデザインは、多くの若者の共感を得ている。これは、ドイツ語圏の機能主義的志向とフランス語圏の自由な発想が交じり合ったともいえる。このようにスイスデザインは、幅の広さが特徴ともいえる。

スイスほどデザインに無数の規制のある公共空間は珍しいといえる。新しいデザインは、常に規制の対象となるが、それは常に高次のレベルで要求されるものであり、知識や趣を集積化することにより解決されている。スイスのデザインは、建築や美術と同様にスイスの印象を世界に広める上で非常に理想的な役割を果たしているといえる。今日もスイスは、デザインを通じて経済面だけでなく文化面で多くを発信している。

スイスと浜松、共に目指すところは、「小さくても美しいデザイン」であり、デザインを通じた文化の発信であるといえる。浜松の風土を背景に日常生活にデザインが根付くということを目指し、デザインを生活の豊かさに位置づけたデザイン研究活動を目指していきたい。

シンポジウム「人を豊かにするデザインの力:スイスから学ぶこと」会場

※本研究は下記研究者による共同研究として実施された。

代表研究者　河原林桂一郎（デザイン学部長）

共同研究者　谷川真美（文化政策学部芸術文化学科）

佐井国夫（デザイン学部生産造形学科）

土屋和男（常葉学園大学造形学部）

特別研究紹介 2

（平成18年度 学部長特別研究）

文化交流の道としての東海道

佐野真由子（文化政策学部芸術文化学科）

2年半前の春、何のゆかりもなかった浜松に越してくるにあたり、心浮き立ったのは、ここが江戸時代の大幹線道、東海道の膝元に位置するということであった。

初めて東海道に魅せられたのは、さらに3年を遡り、小著『オールコックの江戸――初代英国公使が見た幕末日本』（中公新書、2003年）を執筆していた最中である。1859年に来日し、外交官として歴史上初めて江戸に駐在したラザフォード・オールコックは、幕府の抑制に抗して積極的に日本の実情を観察し、ヨーロッパへの最初の日本美術紹介者になったことでも知られるが、1861年には、長崎から江戸までの列島縦断旅行を敢行している。彼が歩いた道をたどりながら、150年前の各地の風景の中に身を置いてみようとすることは、何にも勝る楽しい仕事であった。その中で、オールコックという人物から東海道そのものに視点を移し、鎖国中も多くの外国使節が通行したこの公道の文化交流史的意義を探ってみたいという考えの芽を、オールコックが私に与えてくれていたと言える。

浜松周辺は、その当時のフィールドワークで歩き残した部分であった。そこにやってきて、しかも住まいは旧浜松宿中心部にあたり大手門跡も至近距離ということになれば、このテーマを実践してみないわけにはいかない。まずは隣の宿へと、ある週末、旧道をたどって舞阪までを歩く道々、プロジェクトの展望が自分の中でだんだんと形をなしていった。

「文化交流の道としての東海道」というテーマは、昨年度学部長特別研究のタイトルに使用したが、これから数年間を念頭に置いた計画全体の趣旨を表現するものでもある。むろん、静岡県を中心とする地域で、東海道を取り上げること自体には何ら新味はない。しかしこの街道の歴史を、文化交流の空間という観点から見直すこと、その際、東海道に関する文献に時おり見られるように、単に鎖国中も外国人が通行したという事実をもって文化交流とするのではなく、外交史と郷土史の領域における綿密な史料調査を前提に、人々の日々の生活の営みが、江戸時代の東海道というものを通じて、直接国際社会の動きにつながっていくダイナミズムを検証したいというのが、本研究の志向するところである。

また、さらに長期的には、こうした歴史研究の成果を踏まえて、より実践的な文化政策との連携を視野に入れた「（国際的）文化遺産としての道」論につなげていきたいという夢も持っている。が、それはまだまだ先の話である。

昨年度の研究においては、上述のオールコックの旅を含め、江戸時代に東海道を通行した外国使節らの旅とその前提条件を、史料によって跡付けることに努めた。なかでも、当時参加していた国際日本文化研究センターの共同研究会「前近代における東アジア三国の文化交流と表象」において、この研究班のテーマに、東海道通行という切り口からアプローチする機会を得たことは、とくに朝鮮通信使についての認識を深めながら本研究を進めるうえで大きな助けとなった。外国使節にいかなる条件で通行を許容するかをめぐっての幕府内での議論に関する史料を追う中で、基本的に19世紀初頭までの問題と考えられてきた朝鮮通信使の歴史と、主に1850年代以降の問題である欧米との交流の歴史が、その表面上の懸隔にもかかわらず、一続きの外交ないし文化交流史と言いうるものであることがわかってきたのである。

幕末に欧米諸国の使節への対応を迫られた幕府は、朝鮮通信使に関する前例を詳細に調べ上げ、その中から新たな時代に向かう世界観をもつくり上げていくことになる。その際、非常に具体的かつ重要な鍵となったのが、日本国内に入った使節らの移動、つまりは街道通行の問題が、外交儀礼の観点から議論された局面なのである。そこからは、朝鮮を対象とした外交経験の蓄積が、欧米に対する個々の場面での決断に直接影響し、むしろ土台になっていたことが明らかになるのだが、通常、対朝鮮外交と対欧米外交を取り上げる研究者群が分かれているためか、こうした両者をつなぐ見方はこれまで生まれなかったようである。自分自身も幕末欧米外交を専攻とする私に、近世と近代の隔たりを越える橋をかけてくれたのは、まさに東海道ということになる。（この研究成果は、国際日本文化研究センター第29回国際研究集会にて「幕末の対欧米外交を準備した朝鮮通信使――各国外交官による江戸行の問題を中心に」として発表した。）

今年度は、とくに先述のオールコックの旅についてさらに詳細を調べるため、「初代駐日英国公使の日本縦断旅行（1861年）をめぐる文化交流の諸相」とのタイトルで、学部長特別研究を継続させていただいている。その道中、浜松から見附方面へ向かうオールコックが「道は、いぜんとして砂を十分にまいた大通りで、ただところどころにきれいなひなびた村があり、マツの一種をきちんと刈りそろえた生垣があった。全体のこの牧歌的な効果……」（山口光朔訳『大君の都』（中）、岩波文庫、1962年）と書き残したその面影は、残念ながらいまの浜松にはない。しかし、心の眼と耳を澄ませて丹念に歴史の足跡をたどっていけば、この地はなんと豊かな文化交流の記憶に満ちていることか。

浜松に住まいながら東海道のことを調べていてうれしいのは、地元の方々との出会いの中でこれが話の種となり、皆さんが喜んで知恵を貸してくださり、それがまた新たな出会いへとつながっていくことである。浜松で育った学生たちと古地図を持って道をたどれば、彼女らの脳裏にも、思いも寄らなかった往時の大宿場町があらわれてくるようである。こうして原稿を書いている窓からも東海道が眺められる、その風景の中にオールコックや歴代朝鮮使節たちの行列を追いながら、「文化交流の道としての東海道」の姿をじっくりと明らかにしていきたいと思っている。

特別研究紹介 3

（平成18年度 研究科長特別研究）

ぼくらはまちの探検隊

～大学院と小学校協働による都市空間解析～

寒竹伸一（デザイン学部空間造形学科）

①まちの針と糸を探しなさい
②まちの落とし物を探しなさい
③まちのアンパンマンを探しなさい
④まちのボーダレスを探しなさい
⑤まちの子供ドアを探しなさい
⑥まちの声を伝えなさい
⑦まちのノッペラボウを探しなさい
⑧あなたのチームのまちを探しなさい

自分たちの暮らすまちについて考えてもらうために、大学の北側にある浜松市立船越小学校の6年生に出した問題です。

小学校で行われている都市空間についての教育は、社会科でのまち歩き体験が中心となっていますが、その体験と解析は、表層的であり、運営も小学校内での閉じたものとなっているように思われます。また、対象となる現代日本の都市は、経済膨張を優先するあまり、消費と労働のための大人優先の空間になってしまっています。

今、小学生は自分のまちの歴史を知り、理解し、将来の生活へとつなげるためにも、どのような都市デザインが必要なのか、深く考える契機を必要としています。

大人のための都市デザインばかりを学問してきた大学院生も、子供と都市空間との関係について考える契機を必要としています。

そこで、地域に開かれた大学院として、まちはどのようなデザインが必要なのか、今までのように小学校だけで考えてもらうのでなく、都市空間に関する体系知を有する大学院と小学校が協働することによって、双方ともに高次の都市空間認識へと到達することができるのではないか考え、本研究を計画、実施いたしました。

大学院デザイン研究科都市デザイン系院生とデザイン学部空間造形学科の学生を中心とした18名のスタッフと浜松市立船越小学校6年生40名により、8つのチームを編成しました。1チームの構成は小学生5名、大学院生1名、学部生1名です。その8つのチームに冒頭に記載しました8つのテーマを私からの指令というかたちで提示し、11回のスタジオ型ワークショップという手法で自分達のまちについて考えてもらいました。12回目は、自分達の考えを目に見える形でプレゼンテーションしてもらいました。

1 回目　2006/5/23（火）チーム分けと自己紹介、8つの指令の提示
2 回目　2006/5/30（火）地図の解体（空間の役割別に10色5つのレイヤー図象を作る）
3 回目　2006/6/01（木）まち観察1（絵、言葉、写真での記録）
4 回目　2006/6/06（火）まち観察2（インタビュー中心のまち歩き）
5 回目　2006/6/12（月）世界の様々なまちの紹介と形について講義をしました。
6 回目　2006/6/20（火）発表に向けたディスカッション1（アイデア出しのための自由な討論）
7 回目　2006/6/22（木）・発表に向けたディスカッション2（まとめのための討論）
8 回目　2006/6/27（火）発表のための作品作成開始
9 回目　2006/7/03（火）発表作品の完成
10回目　2006/7/05（木）発表リハーサル1（授業参観日）
11回目　2006/7/10（月）発表リハーサル2（修正）
12回目　2006/7/11（火）静岡文化芸術大学で発表

2006/11/04（土）アジア近代建築ネットワーク国際会議の会場、東京大学で発表し、まちの落とし物チームがグランプリを獲得しました。

2つのチームの解答プレゼンテーションを紹介します。

①まちの針と糸を探しなさい

見えない針と糸を分かりやすく伝えるために、リバーシブルな服を作り自分達の意見を発表しています。

左の写真が、糸の見えない表の服で、右の写真が、**あいさつと笑顔**で縫い合わされたことがわかる服の裏です。

②まちのアンパンマンを探しなさい

まちの中には、ある時はアンパンマン、ある時はバイキンマン、ある場所ではアンパンマン、ある場所ではバイキンマンとなる**アンキンマン**が住んでいて、まちは人の使い方によってアンパンマンにもバイキンマンにもなるというプレゼンテーション劇です。

特別研究紹介 4

（平成18年度 学部長特別研究）

韓国の食文化にみる日常と非日常の連続性に関する研究

林　在圭（文化政策学部国際文化学科）

韓国の人々はとりわけ食べ物を重視する。「飯を食べたか」という言葉が挨拶にもなっているほどである。これは貧しさゆえにご飯を食べたか否かをたずねるものではなく、食べる行為を重視する文化をもっているからである。また、韓国の人々は1人で食べることを嫌い、「食事は皆で集まってするものだ」という意識が強く、お祝いや祖先祭祀の際には家族や親族のみならず、隣近所や村人が集まって共に食べる。

韓国の伝統的な食生活は日常食だけでは完結せず、儀礼食を組み合わせることで、全体的な栄養バランスを維持してきた。日本と同様に、韓国における日常の食事は主食と副食に分けられ、副食として、スープ・キムチ・生菜・ナムル（熟菜）・焼物・小魚の佃煮などのおかず（「飯饌（バンチャン）」と呼ぶ）から構成されている。また副食の食物には、唐辛子やニンニクのほか、醤油・味噌・ゴマ・お酢・砂糖、万能ネギなど多くの薬味（「薬念（ヤクニョム）」と呼ばれる）が用いられる。そのため、多種多様な副食をとおして均衡のとれた栄養素を取り込むことが可能であった。しかしながら通常の日常食は、野菜料理を中心とした質素なものである。とくに、伝統的に村落社会における日常の食事はいたって質素であった。

写真1　祖先祭祀の供物

これに対して、祭祀や結婚式・還暦、葬式などの儀礼の際に用意される食事は、その量や質においてたいへんなご馳走であった。いずれも日常の食事では滅多に口にすることのない肉料理や魚料理をはじめ、モチやチヂミや果物を食する機会ともなっている。なかでも、膨大な回数に及ぶ祖先祭祀（写真1）では、祭祀の直後に行われる家族や参祀者だけによる神人共食の「飲福（ウムボク）」（直会）ばかりでなく、翌朝には親しい者や近隣の人々を招いて共食（飲福）が行われる。飲福では招かれたすべての人々に、準備された食べ物をひと揃いずつ提供するのが一般的であった。また来られなかった人々に対しても、同じものを紙に包んだり、お盆に盛ったりして、その家まで届けるのが習わしであった（これをとくに「頒器（パンキ）」と呼ぶ）。今日では祖先祭祀における招待客の範囲が縮小傾向にあるが、今でも豪華な料理が用意され、村人を招いて飲福行為が盛大に行われているのが、「チャンチ」と呼ばれるお祝い（結婚式・還暦祝い・80歳祝いなど）の時である（写真2）。こうした儀礼や接客以外に肉料理を食べることは村落社会ではほとんどなかった。

写真2　80歳祝い

韓国中部地方の忠清南道の一村落を対象とした、日常の食事記録（2006年）から村落社会における日常食の基本パターンを析出してみると、日常食の基本パターンは主食（1品）＋副食（4品）のご飯・キムチ・ナムル・生菜・煮付に、ときおりスープまたはチゲという構成のものであった。今でも、村落社会における日常食が質素であることがうかがえる。

他方、祖先祭祀の飲福過程をみると、儀礼食の分配・贈与は村落社会を単位として行われ、村落社会全体の互恵的生活互助交換の一輪として機能している。贈与を受けた人は、後に自己が挙行する祖先祭祀において同様にお返しをする。すなわち、祖先祭祀を介して頻繁に肉や魚料理、モチ等が分配・贈与されている。村落社会を範囲とした非日常食の共食行為が、人々に良質の動物性蛋白質の供給源となっている。こうした日常食と儀礼食が全く独立的に自立しているのではなく、相互に不可分の関係で結びついているのである。したがって食文化からみると、日常（日常食）と非日常（儀礼食）とが密接に結び付き、両者は連続性をもっていることが認められる。

しかし1970年代の都市産業化、1985年頃の高度経済成長、さらに1990年代以降の外食産業の隆盛などの外的要因によって、食生活にも変化が起きている。とくに1990年代に入ってからは、多くの儀礼食による食物の贈答交換機能が失われ、日常食の肉食化が進行しつつある。

[文化芸術セミナー]

オーストラリアの芸術と文化

2004年度より3年間にわたり、学長特別研究の資金助成を受け、オーストラリアの多文化主義をめぐる学際的研究プロジェクトを実施した。3年間のプロジェクト終了にあたり、2007年2月17日に南281中講義室でセミナーを開催した。ここではとくに芸術と文化の側面に焦点をあて、研究メンバーのうち3名が約70名の聴衆を前に研究成果を報告した。

下楠昌哉准教授（国際文化学科）は、「ブッシュから多文化へ～豪州ミニ文学史～」と題した発表で、英語で書かれたオーストラリア文学の歴史をたどりながら近代国家オーストラリアの歴史を概観し、現代オーストラリアで活躍する多様なバックグラウンドを持つ作家たちを紹介した。

高田和文教授（国際文化学科）の報告は、「オーストラリアにおけるイタリア系コミュニティの演劇活動について」とのタイトルの通り、シドニー、メルボルン、アデレードで活動する主要なイタリア系劇団・劇作家を取り上げ、イタリア系コミュニティの演劇活動を紹介すると同時に、それを手がかりとしてオーストラリアの多文化主義政策の現状について論じた。

「アボリジニ・アートの〝正しい展示〟をめぐって」と題した佐野真由子講師（芸術文化学科）の報告では、先住民であるアボリジニによる現代美術作品（絵画）をめぐる議論が紹介された。アボリジニ絵画はオーストラリアの代表的な「お土産」として象徴的に活用される一方で、美術品としての正当な評価をされてこなかった。美術館という空間での正当な評価を求める努力は、先住民としての権利回復を求める運動と強く関連しているとの指摘がなされた。

私たちの研究は、オーストラリア研究を専門としない研究者が、専攻地域・分野での研究経験を踏まえて相互に刺激を与えあいながら進めた共同研究である点に特徴がある。そこから得られた知見は、"多文化都市"としての性格をますます強める浜松において、今後の課題を考えるうえで重要なヒントを与えてくれた。

池上重弘（文化政策学部国際文化学科）

[ギャラリーホール]

様々な「出逢い」の演出

学生自主企画「金森穣講演会・Noismワークショップ」報告

いま芸術をめぐっては、芸術家と観客・聴衆との間に乖離が生じ、創り手と受け手が、芸術という共通の土俵を共有しにくい状況が生まれている。創る側の論理が先鋭かつ専門化し、受け手の感受性がついてゆかないと解釈することもできる。

その上わが国では、せっかく全国各地に公立文化施設が造られながら、その多くがソフトをもたない単なるハコに過ぎず、芸術家が地域に常駐して創造する姿に接することも少ない。なおさら創り手と受け手の乖離が進んでいかざるを得ないのである。

そのような状況の中で、斬新な芸術創造を展開している芸術家と随伴し、その活動を受け手へと繋ぐことが、生きたアーツマネジメントを学ぶ上でも大切だと考えられる。

わが国にあって、静岡芸術劇場とりゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館は、芸術監督制や専属芸術集団などの創造のソフトを有し、世界にその高度な作品を発信し続けている極めて稀有な公共劇場である。そしてりゅーとぴあの舞踊部門芸術監督を務める金森穣は、ダンスカンパニーNoismを率いて旺盛な創造活動を展開する、今最も注目される芸術家の一人である。

今回の講演会とワークショップは、静岡県舞台芸術センター（SPAC）が主催するShizuoka春の芸術祭2007に、Noism07が出演する好機を捉え、卒業生も含む本学の学生たちが自主的に企画し、実現に漕ぎ着けたものである。西ギャラリーでの一週間に及ぶ展示も含めて、運営も総て学生たちの手によって行われた。

ダンスカンパニーNoismの命名の由来は、既成の主義（ism）をもたないという意味のほかに、能の抽象性や芸術性を追求する意味もこめられているとのことである。幸い能楽師である梅若猶彦准教授（芸術文化学科）の協力も得て、創り手と受け手の出逢いのほかに、現代のダンスと伝統芸術との出逢いも実現することができたことは、望外の収穫であった。

鈴木滉二郎（文化政策学部芸術文化学科）

静岡国際オペラコンクール

OPERA SHIZUOKA INTERNATIONAL OPERA COMPETITION

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

「静岡国際オペラコンクール」は、本県ゆかりの世界的プリマドンナ三浦環（ちょうたま）の没後50年を記念して、1996年から3年ごとにアクトシティ浜松を会場として開催しています。

このコンクールは、声楽界における有能な人材を発掘し、広く音楽文化の発展を願うとともに、国際交流を通して国内外との連携を深め、世界に広がる"しずおか文化"を創造することを目的としています。

コンクールでは、世界30カ国以上の応募者の中から予備審査を通過した若き声楽家たちが、10日間にわたりハイレヴェルな競い合いを繰り広げ、世界に名高い審査員による厳正な審査が行われます。運営はホスピタリティにあふれた多数のボランティアの協力を得て円滑に進められています。こうしたコンクールの実績は国際的に高く評価され、2003年には権威あるコンクールのみがメンバーとなれる「国際音楽コンクール世界連盟」に、声楽分野としてはアジア地域で唯一加盟が認められました。

このような国際コンクールの開催による文化・芸術の実践的な活動が本学の教育・研究に資すると考え、今年度よりその運営を本学が担うことになりました。

教育の一環として学生の参加を実践したのが、2008年1月19日に開催するコンクール・プレイベント「オペラ・ガラ・コンサート」のポスター、チラシ等の公式デザインを本学学生の公募により制作したことです。このコンサートはこれまでのコンクールの上位入賞者を招き、節目となる第5回コンクール（主催:静岡県、静岡県教育委員会、本学、実行委員会）を盛り上げようという趣旨のものです。

「静岡国際オペラコンクール」が本学に新しい風を運んで来ました。序曲は今、鳴りはじめたばかりです。

制作:デザイン学部技術造形学科3年
松崎 貴史

三浦環とプッチーニ
（写真提供:佐藤玉喜氏）

国際交流は新たなステージへ

～アメリカ・中国・韓国そして～

上野征洋（副学長・国際交流委員長）

2007年の春から夏へ、本学の国際交流活動に新たなページを開くいくつかの出来事がありました。その動向をお知らせし、さらなる進展に向けて皆さんのご理解、ご協力を得たいと思います。

3月中旬。2年前から交流・提携の交渉をすすめていたオハイオ州フィンドレー大学と協定締結の運びとなり、杉田副理事長と私が渡米してデボー・フリード学長との間で調印式を行ないました。引き続き、浜松市の友好都市ニューヨーク州ロチェスター市を通じて、同市のナザレス大学からも交流の打診があり、鈴木元子教授（国際文化学科・国際交流委員）による訪問・視察を実施、先方からはきわめて前向きの良い感触がありました。

5月には、コロラド大学エリクソン教授の「日本研究チーム」教員6名と学生6名が来訪。国際文化学科の有志（学生と教員）の自宅でのホームスティやエリクソン教授による特別授業の実施など、中味の濃い交流が行なわれました。

6月にはフィンドレー大学の原田芙民子教授が来学し、本年度からフィンドレー大学への留学を希望している本学学生と面接。懇切な説明に学生たちはやや感激の面持ちでした。7月24日には、そのフィンドレー大学第一期留学生8名の壮行会を行ない、川勝学長、山本文化政策学部長からの激励を受け、8月中旬、2つのグループに分かれて、オハイオ州へ旅立ちました。

さて、中国との交流では7月4日から上海工程技術大学で、『中日三校優秀卒業設計展』（本学のほか、九州産業大学が参加）が開催され、本学デザイン学部学生の作品40点を展示、宮内博実教授（メディア造形学科）による「日本の色彩文化とデザイン」という記念講演も行なわれました。

8月21日から24日まで上海工程技術大から14名の学生と教員2名が来日。本学訪問ではデザイン学部深田てるみ准教授（空間造形学科）の講義、SUACデザインセミナー、ヤマハの見学など充実したプログラムを堪能して富士登山へ。本学学生16名のアテンドによる交流は新たな友情を育んで、成功裡に終了しました。

他方、2005年春に交流協定を結んだ韓国の湖西大学からは、新たに3名の留学生を後期課程より受け入れます。林在圭准教授（国際文化学科）の指導で勉学の準備を整え、履修を始めます。やがて本学学生と打ち解けて、キャンパスで活躍する姿が楽しみです。

このように、今年は約6ヵ月の間に、アメリカ、中国、韓国それぞれの提携校との交流が進み、さらにイギリスのウェールズ大学、前掲のナザレス大学、ソウル国立科学技術大学校などへは訪問調査を実施するなど、今後に向けての活動を準備中です。

国際交流活動は着々と進展しつつありますが、その成果は未だこれからです。まず、世界へ羽ばたく学生のサポートを、次いで教職員による研究交流や共同事業などの実践へ、そして質の高いグローバルな交流活動の展開へと段階を追って充実させてゆくこと、それが国際交流委員会の取り組みです。これからも支援や協力、そして要望や提言をお願いします。

本学開催 学会報告

日本都市計画学会中部支部主催・地域連携シンポジウム

阿蘇裕矢（文化政策学部文化政策学科）

2007年2月26日、日本都市計画学会中部支部が主催する地域連携シンポジウム『新たな国土形成とまちづくりの実践』が開催され、一般の方々を含め県内外から130名が参加した（13:00～17:40、南281教室）。

シンポジウムは、瀬口哲夫・日本都市計画学会中部支部長（名古屋市立大学大学院教授）の挨拶の後、大西　隆・日本都市計画学会会長（東京大学大学院教授）の基調講演（『国土形成と地域づくり』）が行われた。ついで、『政令指定都市を迎える浜松市の都市課題と展望』（石川岳男・浜松まちづくりセンター長）、『環境共生のまちづくり』（阿蘇裕矢・本学文化政策学科）、『ユニバーサルデザインのまちづくり』（古瀬 敏・本学空間造形学科）の3つの講演が行われた。

パネルディスカッションでは、大貝 彰・豊橋技術科学大学教授のコーディネートにより、『協働による浜松のまちづくり』をテーマに、根本敏行（本学文化政策学科）のほか、建築士会、市民活動組織、コンサルタントの代表者が登壇し、少子高齢化時代のまちづくりなど、多面的な観点から熱心な討議が行われた。討議の後、会場を移して参加者の交流会が行われた。なお、花澤信太郎（本学空間造形学科）が準備の段階から委員として参加した。

日本都市計画学会は、1951年に創設されて以来、都市計画において学術的、実務的な面から活動を行ってきた学術団体であり、現在の会員数は5,257人。今回のシンポジウムは、「都市計画CPD」注）の認定プログラムである。

注）CPD=Continuing Professional Development（継続的専門能力開発=継続教育）

日本文化政策学会設立総会

片山泰輔（文化政策学部芸術文化学科）

2007年6月30日（土）の午後、本学講堂において日本文化政策学会を設立する総会が行われ、日本初の文化政策学部を持つ本学が発祥の地となる日本文化政策学会が誕生した。2005年11月、本学大学院文化政策研究科主催で開催された「文化政策研究大会2005 in 浜松」がきっかけとなり、参加した全国の研究者等が、2006年春に文化政策研究会／文化政策学会準備会を発足させ、12月に東京で研究大会を開催するなど、学会創設に向けて準備を進めてきたが、このたび116名の創設会員をもって正式に旗揚げされたものである。会長には中川幾郎帝塚山大学教授が、副会長には伊藤裕夫富山大学教授が就任した。準備会から継続して本学に本部が置かれ、片山泰輔（本学芸術文化学科）が理事長に就任し、会の運営にあたる。設立総会は、中川会長の講演のほか、青木保文化庁長官の記念講演、鈴木康友浜松市長、本学の川勝平太学長の祝辞、山田太門文化経済学会〈日本〉会長、田代富保社団法人企業メセナ協議会事務局長からの応援メッセージなども寄せられ、各界からの期待の大きさが伝わる華やかな総会となった。

学会の主要な事業としては、学術誌『文化政策研究』の発行と研究大会の開催を軸に展開される予定である。学会誌の第1号は2007年度末を予定しており、また、第1回の研究大会は2007年12月1・2日に東京大学本郷キャンパスで開催される予定である。

平成19年度日本デザイン学会第54回春季研究発表大会

河原林桂一郎（デザイン学部長）

平成19年度の日本デザイン学会春季研究発表大会は、2007年6月22日（金）より24日（日）まで本学にて開催された。今回のテーマは、「産・学・官とデザイン」で同学会会員を中心に本学関係者を含め500名以上の参加があり、学会史上最大規模の大会となった。

大会初日には、本学川勝平太学長による基調講演があり、「21Cの国土のグランドデザイン―『美しい国づくり』に向けて」と題し、森の州、野の州、山の州、海の州の四州からなる「ガーデン・アイランズ」による「富国有徳」の国、美しい日本の姿と「21Cは、文化力を中心とした美しい国づくり」について語られた。

続いて、スズキ株式会社デザイン部の吉村等部長による「スズキデザインの目指すもの」の特別講演があり、乗用車SX4のデザイン開発ストーリーを通じてデザインの考え方や手法、今後のスズキブランドの目指すものなど、浜松発デザインについて紹介された。

今回のテーマである「産・学・官とデザイン」に基づいて、「21世紀、デザイン教育再考」「東海地区デザイン事情」「デザイン・インターンシップのゆくえ―企業におけるメリット・デメリット」の3つのセッションが設けられた。いずれにおいても各パネラーからの積極的な発言に加え、参加者の鋭い質問も続き、密度の高い議論がなされた。

口頭研究発表（180件）とポスター発表（51件）では、創造性とデザイン、デザイン史、環境に基づくインタラクションのデザイン、グラフィックタイポグラフィ、デザイン方法論、情報とデザイン、感性工学、形態論・建築・インテリアその他、ファッション・デザインとメディア、デザイン教育、コミュニティ活動のデザイン、デザインサーベイ、デザインマネジメント、ユニバーサルデザインの各分野にわたって会員の研究成果が発表され、熱心な質疑応答が続いた。

本大会は、全国から参加された企業デザイン関係者、行政デザイン関係者、デザイン教育関係者に本学や浜松を理解していただける貴重な機会でもあった。モノづくりのまち、浜松での初の大会開催であったが、東海地区のモノづくりの技術力、製品生産力に加えてデザイン力のポテンシャルの高さが、この地域の持続性と新展開を支えるユニークな産業資産であり、文化力であるとの認識を参加者に新たにしていただけたのではないかと考える。

INFORMATION インフォメーション

公開講座

○前期公開講座
「"もてなし"の文化学Ⅱ」―深みのある暮らしのために―
（全5回、9/22～11/10）

○後期公開講座
「"東アジアを知る"」―新しい時代のために―
（全7回、11/17～1/26）

○専門講座
「Web3DXVLによる3次元CADデータの活用技法－Ⅲ」
（2回、9/14、2/22）

○夏季公開工房
（4メニュー、8/25～8/26）

○特別公開講座「ロウソク能」（10/9～10/11）
第一夜　能講座 ―知識を灯す―
第二夜　能講座 ―知識を渡る―
第三夜　ロウソク能　能『石橋』

○文化芸術セミナー
室内楽演奏会3
2/23 浜松　3/2東京

編集後記

本号では、4月に就任された上野センター長に文化・芸術研究センターの今後のあり方についてご執筆頂いた他、4本の平成18年度特別研究を中心として、文化芸術セミナー、ギャラリーホールイベント、オペラコンクール、国際学術交流、学会報告など本学における様々な活動をご紹介することができました。今後も本学（SUAC）の多彩な"研究リソース"が社会の"ニーズ"と出逢い、大きな成果となって結実していくプロセスに注目していきます。（St）

Art & Culture
文化と芸術
文化・芸術研究センター
ニュースレター
Vol.6
September 2007

編集人：上野征洋、冨田晋司
発　行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
（事務局　静岡文化芸術大学 企画室）

PRINTED WITH SOY INK
古紙配合再生紙及び大豆インクを使用しています